

# なぜ

## ——多重疑問詞疑問文における「なぜ」の性質——

村 田 明

キーワード：優位性効果 多重疑問詞疑問文 顕在的統語部門 LF

### 0. 目的

村田(2005)で、次に掲載するような多重疑問詞疑問文における複数の疑問詞の振る舞いに対する意味論的考察が行われている。

- (1) a. 誰が何を買ったの  
b. 何を誰が買ったの
- (2) a. 太郎はどこで何を買ったの  
b. 太郎は何をどこで買ったの
- (3) a. 太郎はいつ何を買ったの  
b. 太郎は何をいつ買ったの
- (4) a. 太郎は何をなぜ買ったの  
b. \*太郎はなぜ何を買ったの

(1) - (3)は a、b 対が、2 つの疑問詞の位置を交代できることを示している。このことで、日本語には、一見、優位性効果が働いていないように見える。ところが、(4)の a、b 対は、疑問詞「なぜ」に関しては、多重疑問詞疑問文で優位性効果が働いているように見えることを示している。

(4)の現象に対して、村田(2005)では、(5)の形状の多重疑問詞疑問文では、

- (5) [ ... wh<sub>1</sub> ... [ ... wh<sub>2</sub> ... ] ]

wh<sub>1</sub>が独立変数、wh<sub>2</sub>が従属変数として働くというWilliams(2005)の考えに基づいて、なぜ「なぜ」が独立変数(wh<sub>1</sub>)になれないのかが考察されている。本稿では、まず第1節で、「なぜ」に関する上記の疑問が、Saito(1994)でいかに説明されているかを示し、次にその問題点の指摘と、修正案の提案を行う。第4.2節でその修正案がいかに働く

かを見る。

## 1. Saito(1994)

Saito(1994)は、(4a,b)の文法性の対照を、次の(6a,b)の形状の違いと、「なぜ」の「ただ乗り者」的性格に帰せしめている。<sup>1</sup>

- (6) a. 太郎は[<sub>VP</sub>[何を]<sub>i</sub> [<sub>VP</sub>なぜ[<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> 買った]]]たの<sup>2</sup>  
b. \*太郎は [<sub>VP</sub>なぜ[<sub>VP</sub>何を買った]]たの

多重疑問詞疑問文における「なぜ」は、(7a,b)に示すように、LF移動する際に他のwh句に「ただ乗り者」として付加することができる。

- (7) a. [<sub>VP</sub>[<sub>NP</sub>[なぜ]<sub>i</sub> [何を]<sub>j</sub>] [<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> [<sub>VP</sub> <sub>t<sub>j</sub></sub> 買った]]]  
b. \*[<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> [<sub>VP</sub>[<sub>NP</sub>[なぜ]<sub>i</sub> [何を]<sub>j</sub>] 買った]]

(7a)は、「なぜ」がその痕跡<sub>t<sub>i</sub></sub>を認可できる形状であるが、(7b)はそのような形状ではない。<sup>3</sup>

Saito(1994)では、「なぜ」が付加詞疑問詞の代表のように取り扱われているように見えるが、一般的には、「いつ」や「どこで/へ」なども、項ではなく、付加詞であると言われている。しかし、「いつ」や「どこで/へ」は、「なぜ」を含む多重疑問詞疑問文で見られる優位性効果的現象は示さない。

- (8) a. 太郎は何をどこで買ったの  
b. 太郎はどこで何を買ったの  
(9) a. 太郎は何をいつ買ったの  
b. 太郎はいつ何を買ったの

したがって、Saito(1994)の考えでは、「なぜ」だけが、多重疑問詞疑問文という特定構文において、「ただ乗り者」として他のwh句に付加してLF移動しなければならない、と規定する必要がある。

前段落で述べたことは、Saito(1994)の短所と思われるが、次の(10)のような例はSaito(1994)の長所と言えるであろう。

- (10) a. 誰がなぜ何を買ったの  
b. [<sub>TP</sub>[なぜ]<sub>i</sub> [誰が]<sub>j</sub>] [<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> [<sub>VP</sub>何を買った]] の

(10a)の「なぜ」は、LF移動する際、(7b)のように「何を」に付加して不認可形状を作らなくても、(10b)のように、「なぜ」よりも高位置にある「誰が」に付加して、認

可形状を作ることができる。この現象は、Saito(1994)では高位 wh 効果と呼ばれて、この効果が説明されている点が、Saito(1994)の長所である。

## 2. Shlonsky(2011)に基づく提案

村田(2005)で、なぜ「なぜ」が独立変数にならないのかを意味論的に述べたが、それが統語構造にどのように反映されるかに関して、Shlonsky(2011)の考えを参考に、その修正案を考えていく。Shlonsky(2011)は、whyの特異性を説明するために、Rizzi(1997)の左周辺構造を発展させて、whyが左周辺の最も低い位置にあるReasonPのSpecに外的併合する構造を仮定している。<sup>4</sup>

(11) ForceP > IntP > TopP > FocP > whP > ... > ReasonP

本稿では、(11)を(12)に修正することを提案する。その修正点は3つあり、それを(13)に示す。

(12) ForceP > TopP [<sub>FocP\*</sub> ([<sub>ReasonP</sub> [+whyQ] )] [<sub>Foc'</sub> ([+whQ])] ...

(13) (11) から (12) への変更点

- (i) whP を FocP に吸収する。つまり、[+whQ]が FocP 主要部に生成される。
- (ii) FocP\*は、多重疑問詞疑問文では、FocP が why を除く wh 句の数だけ生成されることを表す。
- (iii) ReasonPは、多重疑問詞疑問文のSpec FocPに生成される。<sup>5</sup>

疑問詞疑問文における主語と疑問詞の相互作用を調べてみよう。<sup>6</sup>

(14) a. 誰が液晶テレビを買ったの

b. \*誰は液晶テレビを買ったの

(15) a. 太郎は何を買ったの

b. \*?太郎が何を買ったの

一般的に、小辞「は」は話題化された表現に付くと言われていることと、(14a,b)の対照から疑問詞は話題化できないと言える。(15 a,b)の文法性の対照は、非主語疑問詞が焦点要素であるから、非疑問詞主語を焦点要素にする可能性を排除する作用の表れであると思われる。(13i)の変更点は、疑問詞疑問文に見られる、このような疑問詞と主語の間の相互作用を表したものである。(11)から(12)への変更点(13ii,iii)については、第4.2節で具体的に説明する。

### 3. Watanabe(1991)

Watanabe(1991)では、日本語には、一見、顕在的 wh 句移動は無いように見えるが、実は、英語同様、1 個の wh 句が+whCP に空演算子という形で（顕在的に？）移動し、LF で空演算子の位置に当該の wh 句が引き付けられ、多重疑問詞疑問文では、残りの疑問詞が遅れて、先に移動した wh 句に付加すると考えられている。さらに、多重疑問詞疑問文の複数の疑問詞間に作用する(16)の制約が示されている。

#### (16) 関係保持制約

派生のある時点で確立された関係はその後ずっと維持されなければならない。

本稿では、Watanabe(1991) の考えを(17)のように修正する。<sup>7</sup>

(17) i. 疑問詞「なぜ」を含む疑問文は、[+なぜ Q]素性が ReasonP 主要部に基底生成される。

#### ii. 関係保持制約

顕在的統語部門で確立された関係は LF で保持されていなければならない。

第 4.2 節で、(11)から(12)への変更点(13ii,iii)及び(17i,ii)が日本語多重疑問詞疑問文でいかに働くかを論じる。

## 4. 「なぜ」を含む日本語多重疑問詞疑問文

### 4. 1 村田 (2011)

村田 (2011) では、英語多重疑問詞疑問文に優位性効果が観察され、日本語の対応文にそれが観察されないことと、疑問詞「なぜ」を含む多重疑問詞疑問文には優位性効果が作用しているように見えることを、優位性と指示関数を日英語でパラメータ化した次の表で説明することを提案した。

#### (18) 日英語優位性指示関数パラメータ

	優位性	指示関数
日本語	－	＋
英語	＋	＋

指示関数は、第 0 節で述べた多重疑問詞疑問文における独立変数、従属変数の関係を関数化したものであるが、本稿では、この案を採らないので、その説明は行わない。ただ、指示関数の代わりに(17ii)の関係保持制約を提案する。

(19) 日英語多重疑問詞疑問文パラメータ

	優位性(顕在的統語部門制約)	関係保持制約(LF 制約)
日本語	－	＋
英語	＋	＋ <sup>8</sup>

#### 4. 2 「なぜ」の特異性

(1)～(4)を次に再掲載し、その文法性を、これまで述べてきた修正案で説明する。

- (20) a. 誰が何を買ったの  
b. 何を誰が買ったの  
(21) a. 太郎はどこで何を買ったの  
b. 太郎は何をどこで買ったの  
(22) a. 太郎はいつ何を買ったの  
b. 太郎は何をいつ買ったの  
(23) a. 太郎は何をなぜ買ったの  
b. \*太郎はなぜ何を買ったの

(20)から(23)の顕在的統語部門表示は次のようになる。

- (24) a. ... [FocP1[FocP2[TP誰が[VP何を買った]]]]の  
b. ... [FocP1[FocP2[TP何を<sub>i</sub>[TP誰が[VP t<sub>i</sub>買った]]]]]の  
(25) a. ... [TopP[FocP1[FocP2[TP太郎は<sub>i</sub>[TP t<sub>i</sub>[VPどこで[VP何を買った]]]]]]]の  
b. ... [TopP[FocP1[FocP2[TP太郎は<sub>i</sub>[TP t<sub>i</sub>[VP何を<sub>j</sub>[VPどこで[VP t<sub>j</sub> 買った]]]]]]]]]の  
(26) a. ... [TopP[FocP1[FocP2[TP太郎は<sub>i</sub>[TP t<sub>i</sub>[VPいつ[VP何を買った]]]]]]]の  
b. ... [TopP[FocP1[FocP2[TP太郎は<sub>i</sub>[TP t<sub>i</sub>[VP何を<sub>j</sub>[VPいつ[VP t<sub>j</sub> 買った]]]]]]]]]の  
(27) a. ... [TopP[FocP[ReasonP][TP太郎は<sub>i</sub>[TP t<sub>i</sub>[VP何を<sub>j</sub>[VPなぜ[VP t<sub>j</sub> 買った]]]]]]]]]の  
b. \*... [TopP[FocP[ReasonP][TP太郎は[TP t [VPなぜ[VP何を買った]]]]]]]の

(24)の LF 表示は次のようになる。

- (28) a. ... [FocP1誰が<sub>1</sub>[FocP2何を<sub>2</sub>[TP t<sub>1</sub>[VP t<sub>2</sub> 買った]]][+wh<sub>2</sub>][+wh<sub>1</sub>]]の  
b. ... [FocP1何を<sub>i1</sub>[FocP2誰が<sub>2</sub>[TP t<sub>i1</sub>[TP t<sub>2</sub>[VP t<sub>i</sub> 買った]]][+wh<sub>2</sub>][+wh<sub>1</sub>]]]の

(28a,b)両例において、2個の痕跡 $t_1$ 、 $t_2$ が示している顕在的統語部門で確立された関係が、FocPのSpecにある $wh_1$ 、 $wh_2$ によって示されているLFでの関係において保持されている。(28a,b)が関係保持制約(17ii)を守っていることは、(29)に示すようにパターン化でき、そのパターンは、(25)、(26)においても守られていて、(24)から(26)は全て文法的である。

(29) [<sub>FocP1</sub> wh<sub>1</sub> [<sub>FocP2</sub> wh<sub>2</sub> [ ... t<sub>1</sub> ... [ ... t<sub>2</sub> ...

それに対して、(27)の LF は(30)のようになり、(30a)は(30c)に示すパターンで、関係保持制約を守って文法的だが、(30b) は(30d)のパターンで、関係保持制約を守っておら

(30) a. ... [<sub>FocP</sub>何を<sub>jf</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub>[+なぜQ]] [<sub>TP</sub>太郎は<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>jf</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>r</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>j</sub> 買った]]]]

[+wh]]の

b. \*... [<sub>FocP</sub>何を<sub>f</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub>[+なぜQ]] [<sub>TP</sub>太郎は<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>r</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>f</sub> 買った]]]]た]]

[+wh]]の

c. ... [<sub>FocP</sub> 何を<sub>f</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub>] [ t<sub>f</sub> [ t<sub>r</sub> ...

d. \*... [<sub>FocP</sub> 何を<sub>f</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub>] [ t<sub>r</sub> [ t<sub>f</sub>...

ず、非文法的である。

(10)((31a)として再掲)で示された高位 wh 効果も関係保持制約で説明できる。

(31) a. 誰がなぜ何を買ったの

b. ... [<sub>FocP1</sub> [<sub>ReasonP</sub>] [<sub>FocP2</sub> [<sub>TP</sub>誰が<sub>f1</sub> [<sub>VP</sub>なぜ<sub>r</sub> [<sub>VP</sub>何を<sub>f2</sub>買った]]]]た]]の

c. ... [<sub>FocP1</sub> 誰が<sub>f1</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub> [+なぜQ]] [<sub>FocP2</sub> 何を<sub>f2</sub> [<sub>TP</sub> t<sub>f1</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>r</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>f2</sub> 買った]]]]た]] [+wh<sub>2</sub>] [+wh<sub>1</sub>]]]]の

d. ... [<sub>FocP1</sub> wh<sub>f1</sub> [<sub>ReasonP</sub> なぜ<sub>r</sub>] [<sub>FocP2</sub> wh<sub>f2</sub> [ t<sub>f1</sub> [ t<sub>r</sub> [ t<sub>f2</sub> ...

(31b)の顕在的統語部門で確立される、多重疑問詞疑問節中の複数疑問詞間の関係が、(31d)の関係パターンで示されているように、(31c)の LF で保持されている。高位 wh 効果は、ReasonP が元々FocP の指定辞 (ただ乗り者) として生成されることから生じている可能性であると言えるであろう。

ReasonP が FocP の指定辞として生成されることと FocP の複数生成が可能であることから、複数の異なる「なぜ」が同一節中に存在する(32)のようなパターンの可能性がある。

(32) ... [<sub>FocP1</sub> wh<sub>f1</sub> [<sub>ReasonP1</sub> なぜ<sub>r1</sub>] [<sub>FocP2</sub> wh<sub>f2</sub> [<sub>ReasonP2</sub> なぜ<sub>r2</sub>] [ t<sub>f1</sub> [ t<sub>r1</sub> [ t<sub>f2</sub> [ t<sub>r2</sub> ...

(32)のパターンが存在するという予測は、次に示すような多重疑問詞疑問文とそれに対する応答で確認されるように思われる。

(33) a. 誰がなぜ何をなぜ買ったの

b. 太郎が金があるから大型液晶テレビを研究のために、次郎が金がないからトランプを暇つぶしのために買った。

(33)に見られるような同一節中の複数の「なぜ」の可能性は、他の付加詞「いつ」や「どこで」の同一節中複数使用の不可能性と対照をなす。

- (34) a. \*誰がどこで何をどこで買ったの  
b. \*誰がいつ何をいつ買ったの

(34a,b)の多重疑問詞疑問文の不可能性は、次の応答文が無意味であることから納得できる。

- (35) a. \*太郎がエイデンで大型液晶テレビを YAMADA 電気で、次郎がコジマでトランプをジャスコで買った。  
b. \*太郎が一昨日大型液晶テレビを昨日、次郎が昨日トランプを今日買った。

複数 FocP が生成されている多重疑問詞疑問文では、ある FocP が別の FocP 主要部の補部となるので、主要部対主要部の意味関係で、(34a,b)に見られる複数付加詞の非文法性を説明できるであろう。一方、複数「なぜ」の場合は、「なぜ」それぞれが Spec FocP 要素であり、主要部主要部の構造関係を持たないので、意味関係も持てない。従って独立要素として複数生成できるのである。

## 5. 結論

Saito(1994)、Watanabe(1991)、Shlonsky(2011)、村田(2005,2011)に基づく新提案によって、多重疑問詞疑問文における「なぜ」の特異性の説明を行った。その説明の中で、同一節中に複数の「なぜ」の可能性を予測し、「なぜ」を含む多重疑問詞疑問文によって、その予測を確証した。<sup>9</sup>

### 注

<sup>1</sup> Saito(1994)では(6a, b)の主語は主格「が」で表されているが、筆者の直感では、疑問詞疑問文の非疑問詞主語には、「が」ではなく「は」が付くのが自然である。

i) a. 太郎はどこへ行ったの

b. \*?太郎がどこへ行ったの

第3節(13)、(14)も参照。

<sup>2</sup> この例の  $t_i$  は、「何を」の痕跡であるが、この移動はC主要部に生成される疑問要素との整合要求によって引き起こされたものではなく、日本語に広く観察されるかき混ぜ操作によるものである。かき混ぜ操作を受けていると考える理由に関しては、Rizzi(2006)で述べられている基準位置、s-選択位置などの議論を参照。

<sup>3</sup> Saito(1994)はChomsky(1986)の枠組みで論じられているので、(7a)では  $t_i$  が先行詞統率されているが、(7b)では  $t_i$  が先行詞統率されていないと述べられている。

<sup>4</sup> wh は左周辺 whP の Spec へ移動することで、wh 基準(Rizzi(2006)参照)を満たすのであるが、why は、他の wh 句と違って、(11)の ReasonP の Spec から IntP の Spec へ移動することで wh 基準を満

たす。このように考える理由は、次に示す不定詞疑問文における why の特異性を説明するためである。

- i) I asked Bill
- a. whether to serve spiced aubergines for dinner
  - b. who to serve
  - c. what to serve the guests
  - d. when to serve spiced aubergines
  - e. how to serve spiced aubergines
  - f. where to serve spiced aubergines
  - g. ??why to serve spiced aubergines

不定詞節の左周辺は whP の所で母型節につながる、つまり (11) の ForceP~FocP までが刈り込まれると考えることによって、i)g の変則性が捉えられる。

ii) [... matrix ... [whP > ... > ReasonP ...

ii) の埋め込み節左周辺には IntP がないので、why が wh 基準を満たせない。

<sup>5</sup> 査読氏の、「どこで」、「いつ」の+wh 素性が Foc 主要部に生成され、Foc 主要部の同一文における複数生成が可能であるなら、これらの疑問詞の複数生成も可能であるはずだという指摘によって、これらの疑問詞と「なぜ」の分布の違いを説明するため考え出した案である。さらに、4.2 節の(33)、(34)の議論も参照。

<sup>6</sup> 査読氏から、疑問詞疑問文の非疑問詞主語に「が」がついても容認性はそんなに低くなく、次例がそれを支持していると指摘された。

i) 太郎 [が/\*?は]何を買ったことが問題なの

この例の「何を」は従属節の中にあっても、主節疑問要素(文末の「の」が持つ Q 素性)と整合する直接疑問要素である。この直接疑問文の主語は「太郎が何を買ったこと」であり、この主部に疑問詞が含まれているので、本文で主張しているように、この文主語に「は」を付けると許容性はかなり低くなるのではないであろうか。

ii) \*?太郎が何を買ったことは問題なの

疑問文の主語に付く「は」、「が」の例に関しては、野田尚史(1985)参照。

間接疑問詞疑問文では、非疑問詞主語に「が」が付くようである。

iii) 太郎が花子に次郎がその日何を買ったか聞いた

ここでは、考慮しなければいけないことが多い。従属節における「が」、「は」の振る舞い、直接疑問文と間接疑問文における主語の振る舞い、日本語における直接話法と間接話法の区別の困難さなど、これらの問題は今後の課題として、本稿では触れない。

<sup>7</sup> Watanabe(1991)の修正案(17)は日本語でしか検証していない。UG の観点からの考察は今後の研究課題である。

<sup>8</sup> (17b)では顕在的統語部門で確立された関係と述べられているが、これは日本語について調べた結果であって、注6で述べたように日本語以外の関係保持制約の定式化は今後の課題である。

## 参考文献

Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press.

村田 明 (2005) 「なぜ「なぜ」は独立変数にならないのか」、『信州大学留学生センター紀要』第6号

村田 明 (2011) 「優位性効果と指示関数」『信州大学人文社会科学研究所』、第5号

野田尚史 (1985) 『日本文法セルフマスターシリーズ1「は」と「が」』、くろしお出版

Rizzi, L. (1997) 'The fine structure of the left periphery' in *Elements of Grammar: a Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, L. (2006) 'On the form of chains: Criterial Positions and ECP effects' in *Wh-Movement: Moving on*, eds. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, MIT Press.

Saito, M. (1994) 'Additional-WH Effects and the Adjuncts Site Theory', *Journal of East Asian Linguistics* 3

Shlonsky, U. (2011) 'Where's 'Why'?', *Linguistic Inquiry* 42-4

Watanabe, A. (1991) 'Wh-in-situ, Subjacency, and Chain Formation,' *MIT Occasional Papers in*



---

*Linguistics 2*, distributed by MIT Working Papers in Linguistics.  
Williams, E. (2005) *Representation Theory* MIT Press.

(信州大学 全学教育機構 准教授)  
2013年2月2日受理 2013年2月9日採録決定